

1. 触れる、触れられるという幸せ

視界に、青白い光が集まってくる。

痛々しく荒れた指先を扇形に広げながら、目の前に押し出した。

その拍子でひび割れている手の皮膚がぱっくりと開き、飛び上がりそうになる。

生まれてこの方ずっと、この痛みに付き合ってきた。痛いのは何も変わらない。――けれど、今更騒ぐことでもない。

その手に魔力を集中させると、指先に痺れるような冷気が流れ込む。

二週間前に新しい職場となった娼館は、三階まである煉瓦造りの大きな建物だ。

今しがた洗ったばかりのずぶ濡れシーツを三枚、物干し竿に広げている裏庭は、すこぶる日当たりが悪い。

しかし青空は高く、日の当たる場所には色とりどりの花が咲き乱れ、あたたかな風に揺れる。

その風で、長く伸ばしている黒髪が顔にまとわりつくのを、頭を振って払った。

先週まで肌寒かったのに、今週からはリネンのシャツとロングスカートだけで事足りるような柔らかな陽気。

それが遠い記憶の、舞い散る桜吹雪を彷彿とさせた。

指先の冷気をシャツに放つと、軋むような引きつれた音を出しながら凍りつく。

吸い付いた氷は音を立て、弾けるように粉々になって碎けた。

水滴が一瞬でパラパラときらめきながら、破片となって落ちていく。

シーツはひんやりとはしているが、完全に水分が除去されさっぱりと渴いた。

今日だけでもうこれ、四回目だ。

通算十二枚目の洗濯は、まあまあ忙しいペースである。

この力を使うたびに、極寒の地に住む人々の洗濯方法を知っていたのは、このためだったんだと思う。

もともと、前世のその記憶が蘇ったのはちょうどここに流れ着く二週間前だったのだけど。

マイナス五十度の環境下で外干しで洗濯物を凍らせ、その氷を払うことで水分を昇華させて乾燥させるという技術。

ここで敢えてそうするのは、この優しい春の陽気で乾くのをゆっくりに待っている暇が、ないから。

今しがた乾かした三枚のシーツは、また三時間もしないうちに男と女の体液やその他でぐしゃぐしゃになるのだ。

氷の使い手が希少な世界で、生まれつき魔力の制御が出来ず不具合が生じてしまう不完全な身体をしている。

宝の持ち腐れ、万年役立たずだと罵られたこの力が、その故郷を亡くし流れ着いた場所にある娼館では役に立てることがわかり、雇ってもらえた。

もともと賤民としてやってきて、娼婦として売り飛ばされた。持つて生まれた姿形は問題なかったものの、治ったことのない手荒れとひどい冷え性の身体では、男を満足させられないと打ち捨てられようとしていたところを、ここの主人に拾ってもらった。

それでやっと自分にも居場所ができたんだと――、ようやく思えたところだ。

後方にある勝手口のドアが、勢いよく開く音を耳が拾う。
乾いたシーツを、素早く丁寧にたたみながら振り返った。

「――はあー……！　ここだけ冬が戻ったようだよ！　涼しくていいねえ、セオ」

この館の主人、ダリアだ。

勝手口のドアから身を乗り出し、まるで山の頂上にでもいるかのよう
に両手を広げて瞳を閉じている。

五十代に差し掛かったとはとても思えない美しくスタイル抜群な彼
女の肩で、赤茶色の柔らかく艶やかな巻毛がふんわりと揺れた。

「……セオ。アンタの冷気の残滓は、これからの季節うんと役に立ち
そうだねえ」

竹を割ったような性格の彼女には、命を拾ってもらえて本当に感謝
している。

それに彼女だけでなく娼婦としてここにいる娘達も、皆個性的だが
明るく、優しくていい子達ばかりだ。

「夏は皆さんに、氷菓をたくさん作ります！」

「そりゃ楽しみだねえ！ 助かるよ！ ……ああそうだ。そのシーツ
片付け終わったら、ティリアの客に、増強薬を頼めるかい？」

「ああ……、延長ですか」

話しながら勝手口の扉を開け、館の中に二人で戻った。

上からは、「はあんっ……♡ ああっ……♡」と甲高くかわいらしい嬌声が、かすかに耳に入ってくる。

あれは一番人気の、ティリアの声。

この時間の利用客は珍しい。

人気嬢を独占したいという、昼間しか使わない特別な太客の時間帯である。

「……たく毎度無茶させるよあのオッサンも。ティリアは夕方から休ませるつもりだよ」

「ええ。それが良さそうですね。薬をお渡しすると共にお伝えしておきます」

ダリアは頷いて、乾きたてのシーツを奪った。

フロントにつながる廊下の棚に、手慣れた手つきでそれを戻している。

「頼んだよ。アタシは少し出てくる。ギルドに呼ばれたんでね。もしかすると、九騎士や傭兵団の大口があるかもしれない。その心づもりで。セオも休めるうちに休んでおきな」

「はい！　ありがとうございます！」

ダリアと別れ、厨房を通り過ぎた。

『調合室』という札のかかった扉を開ける。

「えーと、増強薬、増強薬……」

人ひとり入れる、というほどの小さな部屋の中に入ると、ところ狭しと薬剤や魔術調合液が棚に並べられている。

取り出した小瓶の中に手のひらから生成した水を注ぐ。さらにそこに薬剤を流し、融合させた。

魔力が溶けやすい水を生成できる力も、ここへ来て大いに役立っている。

お客に作った増強薬と、頑張り屋の人気嬢ティリアへの回復薬も素早く作った。それにこの後の予定を書いたメモを折り、貼り付ける。

部屋に直送させる籠に、紐を手早く括りつけた。

呼び鈴を控えめに鳴らし、機械のボタンを押す。紐を引いて、薬を送り出した。

「……よし！ オッケー」

ふう、と一息つく。昼下がりに、やっとお昼にありつけそうだ。

でも、お腹が空いても全然平気だ。

ここにいて大切な皆が快適に仕事できるように、サポートをするのと。

それが何よりも今は幸せだ。

祖国が滅んで賤民になった時には、こんなふうに誰かの役に立てる日が来るなんて、想像もしていなかった。

——空に浮かぶ、自由交易都市。通称“空の港”。

空賊、冒険者、騎士、商人、兵士、貴族、お忍びで王族も。あらゆる人種がひしめき合う。

千客万来の都、欲望の交差点、空の坩堝……さまざまに称されるこの場所で、ここはおそらく都で一番人気の大衆娼館だ。

記憶があるだけでいうと、二度目の人生。

こちらの世界では、母は私を産んだ際に、そして父は戦線で。

両親に先立たれ、そんな中資源国として狙われ続けた島国である祖国も、あっけなく滅んだ。

お金もなく、行く宛もなく。

賤民としてこの町の娼館に売り飛ばされている途中で、ここに生まれる前の記憶、つまり一つ前の人生の記憶が覚醒した。

そこで初めて気がついたのだ。

——ここが前世で心の底から大好きでやり込みまくったゲーム、『アンリミテッドユニバース』の世界だということに。

そして同時に、この世界には。

私が私になる前から、ずうっとずうっと大好きで、一番育成していたあのキャラクターが存在している。

——いや、“キャラクター”なんて言い方は、もうおかしいのだけど。

画面越しに操作をしないと動かなかった、“彼”が。

この世界では、ちゃんと息をしている。



それは七回目の洗濯を終わらせた、日暮れ前のことだった。
短時間利用の客を捌ききった頃。

へとへとになるまで頑張って太客の相手をしていた、クリーム色の髪を揺らす一番手ティリア。

それから元氣印の二番手であるピンク巻毛ギャルのゼラに、追加の回復薬を手渡そうとしていた矢先。

「――G^ゴO^ーA^トTが来るよ！　ここからは貸し切りだ！　支度しな！」
勢いよく館の正面玄関から入ってきたダリアは開口一番、そう叫んだ。

――えっ……、ご、ゴート……？

瞬間の静寂の中で、ガシャン、とガラスが割れる音が足元で響いた。

そして気がつく。回復薬の入った瓶を、落としてしまったことに。

「あぁっ!?　ちよつとセオ、何やってんの!?」

隣にいたゼラの声にびくりと肩が跳ね、反射的に慌ててしゃがみ込む。

「わ、あ、ごめ、ごめんなさい！ ああ……、もったいないことしちゃった……！ す、すぐに作り直しますね！」

……ちよつと待って、どうしよう。ゴート!? ゴートがくるの!? パニックになりながら破片を手にとろうとして、二人に止められる。

「いやいや、セーオ。どしたん？ そのまま触るの危ねえから。落ちー着ーけー」

そう言って、ゼラが手を重ねてくる。そして「ぎゃっ！ 相変わらず手え、超冷たッ！」とすぐにパツと離れた。

「セオちゃん、どうしちゃったの？ 怪我しちゃうよ！ あとでまた作ってくれたらいいから！」

ティリアもこちらを庇うように背中を摩ってくれながら、しゃがみ込む。

それを見ていたダリアも、出鼻を挫かれたといわんばかりに目を丸くしていた。

「ちよいとセオ、アンタ大丈夫かい？ 体調悪いんじゃないだろうね？ あんまり時間がないよ」

「だ、大丈夫です！ 申し訳ありません！」

奥の厨房にいた、嬢の中では最年長のわがままボディ、ふんわりミルクティーヘアののんびりオーキーが、箒と塵取りを手に出てきた。

「あらあらー。セオのドジっ子さん。はあい、どいてどいてー」

オーキーの箒が集める、シャラシャラというガラスの音を聞きながら、目を泳がせた。

「すみません、オーキーさん」

オーキーは「いいのいいのー」とニコニコしながら、ダリアに向かって声をかけた。

「ねえ、姐さん。炎の騎士団が来るのお？ 半年ぶりくらいかしら？」

……だっ……だよ、その、ゴートだよね!?

前世の私が(主に精神的に)大ッ変お世話になった、『最推し』である『団長』が率いる騎士団の名称、それが炎の騎士団。

さらにその中で、『彼』も含まれた最も人気が高い精鋭の五強がいる。

その精鋭部隊が、通称G O A Tだ。

「ああ！ 久しぶりの団体様さ」
ダリアは誇らしげにこたえた。

「もうお代はいつも通り、たんまり団長マスターにもらってる。満足させてやんな！ よそに浮気させるような半端なお相手したら、ただじゃおか
ないからね！」

きゅー……と白目を剥いてひっくり返りそうになる意識を、慌てて留める。

……待つて。団長^{推し}が……。風俗を使っているという事実^{リアル}……。

膝から崩れ落ちそうになる。

いや、このみんなのことは大好きだし、他のところで発散されるよりは、いいけれど、いいんだけど……！

もちろんゲームの中でそんな生々しい描写は、ひとつもなかった。だからより鮮明に現実味を帯びて、“彼”が存在しているというところが伝わってくるのだ。

この地に転生したことを自覚した二週間前。

もしかしたら、一目でも生で見ることが出来たらどんなにいいだろう！　なんて軽く思っていた。

でも……、これじゃ……。

「マジかゝッ！ はあゝッ！ 超嬉しい！ やつとゼル様に会える！」

浮き足だった元気なゼラの声に、ハッと顔を上げる。

ああ、こっちの世界でもゼルディーンは“ゼル様”と呼ばれているんだ。

おそらくゼラが言っているのは、雷と炎を操るゼルディーンという喧嘩っ早いゴートの切り込み隊長キャラ……もとい、人だ。

ゲームの中で、勿論レア度、強さともにSSR。

美人で元気なギャルであるゼラに、たしかによく似合う（しかもふたり、名前も似ている）。

「あの、ダリア姐さん。私これからお休みをもらう予定だったんですけど……。もしレイ様がご指名くれたら、お通しして大丈夫です」

花のように可愛らしいティリアが頬を染めながらそう言い、控えめに手を挙げた。

「おや、そうかい？ 今日はずつぱりで、悪いね」

レイ様というのは、たぶん時と炎を司るレイックロス。

前世ではファンアートや夢小説、はたまたゼル様とのカップリングなど登場率ナンバーワンのイケメンとして絶大な人気を誇るキャラだった。

頭脳明晰だけど、ちょっと浮世離れしているタイプ。

そんなクールなレイが、癒しと可愛らしさナンバーワンのティリアちゃんと並ぶだなんて、解釈一致すぎる。延々と見ていたい。

……ってそうじゃない。はあ、どうしよう。

想像しただけでキャパオーバーだ。

持ち前のオタク心が大きくもたげて、クッ！ と天を仰いだ。

——しかしまだ嬢達の中から、わが最推しの名前が出てくる様子はない。

……けれどこの調子だと、誰かがその名前をいつ出してもおかしくない状況だ。もし“彼”の名前が出たら……と思うと、早くここから退散したい。

考えないようにしよう。推しだって風俗は使うもの！

この世界ではキャラじゃなくて、今を生きる男性なのだから。いい加減、慣れないと。

そう言い聞かせる。

……でも。

い。今世まで引きずっている、恋心に限りなく近いこの想いを、守りた

い。箒と塵取りを、オーキーからそつと奪った。

「じゃあ、みなさん準備してください。回復薬はお部屋にお持ちしますね！」

オーキーがされるがままに「あらあら……」と目を丸くして、こちらを覗き込んだ。

「セオ、どうかしたの？　なんだか……元気がないように見えるわ」どきっとして背中に冷や汗をかきながら、慌てて愛想笑いを返す。

「ああ、いいえ！　団体様なら、シーツの替えの準備を急がなくちゃと……思いました！」

「その通り！　さあ、忙しくなるよ！　ほらみんな、身体磨きな！　稼ぐよー！」

続いたダリアの一声で、フロントに集まっていた面々が散っていく。

調合室に向かう途中で、ついてきたオーキーが背後で声をかけてきた。

「……そういえば、セオって“東の国”の出よね？　向こうでも炎の騎士団って……有名なのかしら？」

どきつとしたが、中身はいたって純粋な疑問だった。

独立した島国だった故郷の東の国は、半年前に滅んだ。

「あ、はい。噂には聞いていました。でもあまり詳しくはないんです。たしか、九騎士団のひとつですよね？」

……『詳しくない』だなんて、嘘である。

すつとぼけたが、めっちゃ知ってる。

この世を司る九つの属性をそれぞれ宿した騎士団のひとつ。

この世界観を語る上で、欠かせないキャラクター達だ。

遅れてついてきたダリアが、腰に手を当て、ウンウンと頷く。

「そう！　ウチの商売は、この世界に平和をもたらし神聖な秘め事なのさ。彼らはこの世を創る要^{かなめ}。モテにモテて、どの娼館でも引っぱりだかしね。希望あるイイ男の潤いが、みんな欲しいんだよ。ゴートはその中でもウチを最上にしてくれるお得意さんだ。アンタは直接お相手しないにしても、顔を覚えな」

「……はい……」

齒切れの悪い返事をしてしまう。

……ダリアさんごめんなさい。

私……彼らの顔どころか、フルネーム、属性、誕生日、出身地、血液型、身長、性格、好きな食べ物……公式情報はすべて頭にインプットしています……。

……なんて言えない。

その困惑が、どうやら『覚えられない……』と自信をなくしているようにオーキーの目には映ったらしく、やさしく頭を撫でてくれる。

「うふふ、大丈夫よ。みんな素敵だからすぐ覚えられると思うわ。ああ、私も彼に会えるの……とっても楽しみ！」

「あれ……、オーキーさんも、固定客の騎士様がいらっしやるんですね」

「そうなの。ヴァレイスくんっていうんだけどお……、とっても可愛いだよ！」

おお、オーキーさんとヴァレイス！ 意外な組み合わせ……！
いや、そうでもないな。

ヴァレイスは水と炎の使い手で、攻守ともにバランスが優れている。非常に使いやすく強いけれど、実は愛され年下キャラ。

ふわっふわのオーキーさんに可愛がられるヴァレイス……。

うっわ……超似合う……！

それでまた、少しだけ安堵する。

オーキーさんからも「彼」の名前は出なかった。よかった……。

いや、待って。もしかしたら「彼」だけ、別の娼館……!?

え……、無理ムリ無理ムリ。

考えても無駄な妄想に頭をぶんぶん振り、気を取り直して調合室に入る。

割って無駄にしてしまった回復薬の作り直し、さらにいくつか薬の作り置きをしようと、薬草を取り出した。



そうして迎え入れたゴートの面々は、当然だけど画面で見たときよりもリアルで、全員が長身で色男だった。

すらっとしていているように見えても、そこは戦線に立つ騎士。

しっかりと鍛えられていることがわかる身体は、顔に戦場での傷跡も生々しく残っているし、それぞれ使っている香が違うのだろう、近くにくるとイメージ通りという匂いがする。

生身で実在しているという実感が、じわじわと強まる。

雷炎のゼルデーン。

浅黒い肌に黄金の短髪、ばちばちのピアス、琥珀色の目。

予想通り、ギャルのゼラが指名された。

時炎のレイックロノスは銀色の長い髪と白い肌。

そして薄紫の瞳。彼は一番人気のティリアを指名。

水炎のヴァレイスはアクアブルーの柔らかそうな癖っ毛で、くりくりしたオレンジの瞳が特徴的だ。

彼はオーキーが部屋に連れて行った。

それから、さつき嬢の間に話題は出なかったけれど、闇炎のノクス
ライ。

彼も前世では、影があつてナイーブに見えて、実は気が短いという
静と動を併せ持つ超人気キャラだった。

ゴートの中ではヴァレイスと同じくらいの若さで、真っ黒な癖毛と
発光したようなパープルの瞳が目立つ。

まるで夜の闇から抜け出てきたような彼は、紫髪の優しいお姉さん
梓である、ウイスティを指名したようだった。

……本当に今更だけど、みんなめっちゃくちやかつこいい。

ほ、本物だ……！

——そして。

たたんだシーツを片手に、フロントを横切る。

その際にちらつと、ほんとうに申し訳なさを感じながら、ちらりと、その横顔に視線をやった。

アクスタよりも質感のある、束ねられた長くて赤い髪が揺れる。

そしてフィギュアよりも大きくて、分厚い身体。

フロントでダリアと話しているのは……。

……コスプレでもない本物の、リアルな“彼”だ。

……ああどうしよう。感激で泣きそう……！

そう、今日の前にいるのは、グランドマスター前世で涙が出るくらい会いたかつ

た……最愛の推し、炎の騎士団長ラグナスだ。

「——ではよろしく頼む。もし追加で金がかかりそうなら、後でギルドにつけておいてくれ」

こっ、声も、そのまま彼だ！ うううそおおお！ はああ！

声にならない奇声を頭の中だけであげて、息を止めた。

会釈をしながらにも考えず、足早にバックヤードへ向かう。

「……ああ、それからダリア。ちよつといいか」

い、いいなダリアさん、名前呼ばれてる！

ああ、本当にかっこいい。どうしようどうしよう！ かっこ良すぎて、このフロアがなんだか熱く感じる。

「ん、どうしたんだい？」

「……悪いんだが、俺に部屋を一つ貸して欲しい」

その歯切れの悪いラグナスの声に、ダリアは目を瞠った。

「えっ、^{マスター}団長が珍しいね？ 今夜は娘を所望で？」

……ん？ 珍しい？ なんてだろ？

ラグナスは困ったように笑っている。

……えっ……、笑っ……。なに、かつこ……いい……！

ああ、だめだ、神様ありがとう。泣きそう。

「ははっ。……いや、相変わらず俺に女は抱けない。ここに金を落とせなくて、すまないな。実は……ここの宿泊施設に、空きがなかった。いつもアイツらがここを使う間に待たせてもらおう宿も、満室でな。祭りが近いからか？」

——ンッ!?

……今『俺に女は、抱けない』って、……言った？
思わず端から彼を二度見する。

長年推してきたラグナス団長の解釈が変わる。

男性の方が好みなのか!? えっ、団長、そういう感じ!?

「毎年この時期の花祭りは三ヶ月続くけどね、稼ぎ期だっているんな国の商人が集まるのさ。宿屋ったって、どのみち割高だろ? いい

よ。空き部屋ならある。泊まっていきな。で、今夜の女は、本当にいいの？」

「なんだ、譲ってくれるのか？ ……あんたの館の大事なお抱え娘さんの誰かが、丸焦げになってもいいのなら、喜んで」

「……はあ……、いつ聞いても『純血』つてのは難儀な体だねえ。ちょっと待ちな。今部屋を片付けさせるから」

「助かる。宿代は弾ませてくれ」

「今預かってるお代で十分だよ。……ああ！ セオ！」

会話の意味を咀嚼しているうちに、ダリアから名前を呼ばれた。びく！ と飛び上がる。

「は、はいっ！」

「奥の間をちよつと片して、団長を部屋に案内してくれるかい？」

「あ……！ は……はい！」

彼の赤い目がこちらに移って、バチつと視線が変わる。

ごくつと息を呑んだ。

「お、お待ちください。お片付けしてまいりますね」
ぺこつと頭を下げて、足早に奥の間へ向かう。

「ん、新入りか？ あんな子、いたか？」

「あの子は嬢じゃないよ。アタシの個人的なお抱え。雑用を頼んでる
娘さ」

「へえ……」

背後の二人の会話が耳に入る。

推しに認知された、といっぱいっぱいの頭の中で、そのことだけが反芻していた。



ラグナスが休む予定の部屋を片付けるうちに、平静を取り戻した。

掃除をしながら、先ほどのラグナスとダリアの会話を回想する。もしかしたら、彼の有する特殊な属性が問題なのかもしれない。

体が熱すぎて、そういう行為に向いてない……、とか？

けれど、そんな推しのとても難儀な体質を知ってなお、ちよつと安堵してしまった自分がいる。

この予想が当たっていたら、彼はきつとまだ純潔、ということになる。

長年勝手に解釈していた彼のイメージが、どんどん修正されていく。

なんとか気を取り直して掃除を終わらせ、フロントの待合ソファで寛ぐ彼に、勇気を出して声をかけた。

「大変お待たせ致しました。お部屋にご案内いたします。どうぞこちらへ」

「ああ、すまない。感謝する」

奥の間は、普段お客様をもてなす二階ではなく、三階に位置していた。

かたん、かたん。

後ろで重厚感のある、階段を蹴る音がついてきている。

心を無にして気を逸らすと、それぞれの部屋で、少しだけ愉悅の嬌声が漏れ始めているのが感じ取れた。

元はどこかの国の伯爵別荘だったものをリフォームしたらしいこの娼館は、建て付けも良く最高級防音も充分なされているけれど、耳をすませばしっかりと情事の空気は感じ取れる。

奥の間は元々、応接室に使っていた部屋らしい。

とても広くて、薄暗いけれど大きなベッドが一つだけ用意されている。

ごくたまにお忍びで、国賓や要人などが使用する部屋なのだそう
だ。

ここにきて二週間、使うところを見るのは、今日が初めて。

「こちらです。何かありましたら、呼び鈴でお申し付けください」
中に促し、緊張しながらも出来るだけ感じよく会釈する。

「ああ。あ……そうだ。窓を」

「……え？」

「夜中じゅう窓を開けていても、問題ないか？」

隣に立っている彼を内心どきどきしながら見上げると、体が筋肉で分厚く、とても背が高かった。

公式身長、百九十は伊達じゃない。

リアルだとこんな感じなんだ、という純粹な感想がわく。

けれどすぐに、仕事中だ、と切り替えた。

「ええ、もちろんです。お開けしますね」

「ああ、すまない」

彼は座るでもなく、広い部屋の窓を次々と全開にした。

からつとした涼しい夜の風が肌を撫で、心地いい。

二人で、協力しながら窓を開けていく。

「体質でな。炎しか宿していない。放っておくと熱がこもる」

彼はそう言う。「冬はいいんだが」と付け加えて、仕方なさそうに微笑んだ。

……そっか。そういうことか。

どんな表情を返しても、これまで彼が培ってきたものをうまく尊重することができない気がする。

だからただ慈しみを込めて、頷いた。

「そうなのですね。この季節は、夜風も気持ちいいですから」
わざとらしくフォローをするような言葉になってしまった気がして、逆にそれは失礼だったかもしれない、と思いついた。

内心慌てて訂正を口にしようとしたが、彼の声に遮られる。

「……きみは……優しいんだな」

想像以上の穏やかな返答に、そうだったと思い直す。

こういう機微に気がつく繊細さも、彼は持ち合わせている。

そんな達観した王族のような気品が垣間見える限定イベントでの会話は、何度も再生させて見たものだ。

全然リアルじゃない前世の記憶を、いまを生きるリアルな彼に思い出させられるのは、なんだか不思議な気分だった。

「……俺は、炎の騎士団に属する、ラグナスだ」

一瞬、固まった。

えっ、誰よりも存じ上げておりますけど……。

そう思ったけれど、これは自己紹介なのだと気がついた。

あわてて姿勢を正す。

「あ……わ、私は……、セオといいます」

「セオ、か。いい名だな。覚えた」

な、名前呼ばれた！

微笑みがものすつごくかつこいいのは、今始まった話ではない。
窓を開ける手を止めずに一礼して、ドキドキが治らないまま、曖昧に微笑み返した。

「……でも熱がこもるなんて、とても羨ましいです。私は真逆で、冷やすことしかできないので」

彼の、窓を開ける手が止まった。

「そうなのか？ とすると……、セオの属性は……水か？」

「はい。表が氷で、裏が水です」

「……氷？ 氷だって？」

興味を持ったのか、こちらに近づいてくる彼に、またどきりとする。

「ああ、はい。母が氷で、父が氷の純血だったんです」

ラグナスが、赤い瞳を大きくした。

「……氷の純血……まさか、生き残りがいるのか？」

この世界の言い伝えで、体に氷の属性だけを持つ純血種族は、神話の時代に滅ぼされたとされている。

実際は最北端の大地で、ごく少数でいまだに純血を守っている。……らしい。

父から、亡くなる前に一度だけ聞いた話だ。

これは一族の秘密。

娘の私は混血なので、本当は知ってはいけない事実だった。もういない父の秘密を話すのは気が引けて、首を横に振る。

話せるところだけをかい摘んだ。

「生き残りがいるのかどうか……までは……、わからないです。父と母は、駆け落ちしたんだと言ってました」

「……ふむ、なるほど」

考えるように顎に手をやる仕草すらかっこいい。

「……子を成せた、ということ、ご母堂は水と氷の属性だったというわけか」

少し首を傾げてそう尋ねられる。

「そう、聞いています。母は私を産んですぐに亡くなったので、はっきりとはわからないのですが」

「……お父上のほうは、ご存命か？」

静かに首を横に振る。

ラグナスは力無く、「……そうか」と一言呟いた。

会話がひと段落したような、そんな合図に感じた。

同時に、窓が開け終わる。

「……では、ごゆっくり。何かありましたら、またお呼びください」

「ああ。世話をかけたな、セオ。感謝する」

一礼し、やっと緊張から解放される安心感に力が抜けるのを感じた。

ほっとしながら扉を開けようとノブに手をかけた時、彼もドアを開けようとしてくれたタイミングと重なってしまい、ふと手が触れ合った。

あたたかな感触を一瞬だけ感じ取り、思わず反射で手を引っ込める。

咄嗟に「あっ、ごめんなさい！」と謝った。

この私の冷たい手に一瞬でも触れると、みんながゾクゾクつと悪寒がした時のように身をすくめて手を引っ込める。

彼にも不快な思いをさせてしまった、と罪悪感に見舞われた。

「……は……」

けれどラグナスは手を引っ込めることなく瞠目して、その動きを止めた。

「もっ……、申し訳ありません。体温の調節が、私も得意ではなくて」

「いや。ちょっと待て」

「え？」

何秒か見つめあって、……ゆつくりと、ふわっと。

手を掬い上げられる。

「……え……」

そっと指先が指先を、挟み込む。

……うわ、なにこれ、……すごい。超あったかい……。

「……なんだ？ ……これは。なんて冷たくて……気持ちいいんだ」
感じ入る彼の声とぬくもりが、じんわりと芯からの温かさになり伝
わってきた。

じんじんと、ゆつくりと、溶かされるような熱が手の中に染み込
でくる。

……ごつごつしてて、おっきくて、本当にあったかい……。

「……きみは……手を、温められないのか？　ずいぶん荒れているじゃないか」

——フツ、と蕩けていた意識が戻る。ぱつ、と手を離れた。

待って、こんな荒れた手を推しに触られるとか、恥ずかしい。

「あつ……！　えっと……、ごめんなさい、失礼します」

及び腰でふたたび一礼し、ドアノブに再び手をかけて、ドアを開けようとしたとき。

「おい、待て待て」

彼に腕を掴まれる。

多分、今は動揺で顔がものすごく真っ赤になっているだろう。

見られたくない。

掴まれていない方の手で、顔を隠す。

「……ああ、すまない。いや、あー……きみ、俺の手が……その、熱くは……ないのか？」

「……え？」

熱い？ 掴まれた腕を見つめて、首を傾げる。

そんな風には感じない。

「い、いえ……。あつたかくて……」

気持ちいいです、とまでは、さすがに急なことと言えなかった。

「そ、そうか。よし。待て、では……」

そう言うのと彼はなぜか、少しだけ慌てたように部屋の出口の付近で、行ったり来たりした。何かを逡巡しているようだった。

「……今、仕事中、……だよな。よし、少し待っている。ダリアに話をつけてくる」

「……え!？」

彼はそう言うなり、バタバタと部屋を出ていった。

な、なん……何が起きたの？ そして、ダリアさんに何を話してくるんだろう。

呆然と立ち尽くしていると、彼はすぐに戻ってきた。

「……きみの時間を、買ってきた。しばらくここにいて、俺の相手をしてくれないか」

……………へ!?

その言葉を理解するのに、たつぷり二十秒かかった。

彼はこの短時間で、私の時間をお金にして、ダリアさんに支払ってきたらしい。

「……こんな手、放っておけるか。あたためさせてくれ」

手をふたたび掬い上げた彼はそう言いながら、部屋のドアに鍵をかける。

そのカチリという乾いた音で、逃げ場が無くなったことを自覚した。

——それからどうしたのかというと、しょんぼりとした彼に胸の内をぎゅっと掴まれながらも説得し、一度だけ部屋の外へ出た。

もちろんちゃんと伝えた。

嫌なわけじゃない。違う。と。

絶対に言えないしなんの自慢にもならないけれど、私は前世でファンが公開した彼の二次創作を生前、すべてといってもいいレベルで網羅していた。

それぐらい彼のオタクで、膨大な数の同志たちによるあらゆる妄想を浴びてきた人間だ。

それがリアルになるからって、べつに怖気付いたわけではない。

そうではなくて、ダリアがラグナスにどんな交渉をされて、お金を受け取ったのか。

それを彼に直接は聞き辛かったので、ダリアに聞きに戻っただけだ。

なのにダリアときたら、あっけらかんと「ええ？　だから、セオの時間を一晚買わせてくれーって。灰に変えるような真似はしないから、って」と言われ、二つ返事で「イーヨ！」とウインクで親指を立ててお金を受け取ったというではないか。

開いた口が塞がらなかった。

ダリアは「よく考えたらさ、たしかにアンタならいけるかもしれない、と思つて」と言つた。

そして「これはアタシの奢りだよ。よかつたね！　間違ひなくこの星一番の色男だよ！　満足させてやんな！　初仕事、頑張るんだよ！」と増強薬と回復薬、それから避妊薬に潤滑液や香油やらがいっぱいに入った籠を持たされ、そこに追加で袖に透け感のある柔らかなナイトドレスを被せるように乗せられ、「湯浴みしていきな！」とトドメを刺された。

……思わず涙目で、それでも覚悟を決める暇すらなく。

待って。待っておくれよ、ダリアさん……。

せめて心、心の準備をさせておくれよ、ダリアさん……。

心臓が破裂しそうになりながら、言われるがままに身体を清める。

……いや、心の準備をさせてって思ったけど、よく考えたらこれってものすごく……、ラッキーなことじゃない？

リアルな推しに、『俺の相手をしてくれ』と言われた。

おそらく彼はこれまできつと、なかなか人に触れられずに、人知れず苦勞をしてきたはずだ。

その苦しみは、いやというほど共感できる。

万年最上級に冷えきった氷のような身体で生きてきたために、まともな人付き合いはほとんど諦めてきた。

役に立たないと馬鹿にもされた。

誰かと性的に触れ合うなんて、それこそ夢の夢だと思っていた。

彼も……、そうなんじゃないだろうか。

今世で、母のぬくもりは覚えていない。

唯一たためらいなく触れ、抱きしめてくれたのは父だけだった。

前世の記憶が戻ってからやっと、今ここでこの娼館で役に立つ使い方を思いついて受け入れてもらえたばかりで、ここ以外で自分の存在意義を感じた場所なんてない。

人に触れられた前世の記憶がある私のほうが、彼よりもまだ幾分かマシなんじゃないだろうか。

……私の体質は、団長の役に立つんじゃない？

そう考えたら、求められていることに応える勇気が湧いてくる。

私でいいのかな、いや、私しかないからいいのか。

ぱあん！ と頬を叩いた。シャワーがパシャンと弾ける。

今世ではまだ処女だけど、前世からの知識はある。

なんとかなるだろう。覚悟をきめよう。

どうなるかわからない、丸焦げになるかもしれないけれど、彼に燃やされるのなら本望だ。

……よし。やるしか、ない！

結局そんなわけで、彼の部屋に戻るのに一時間以上かかってしまった。

戻った時、安堵したような彼の眉は、すっかり下がってしまっていた。急な罪悪感が一気に込み上げる。

「お、お待たせして、本当に本当にごめんなさい……………！」

「いやいや……………、急な話で、こちらですまな……………い……………」

籠の中身を見て、ラグナスが動きを止める。

「あ……………それで、これ……………は？」

瓶を摘んで頭上に掲げ、増強薬の中を覗き込むような仕草をした彼に、恥ずかしさを押し殺して「ウチで作っている、増強薬です。その……、ダリアさんが……」ともごもご打ち明けた。

ラグナスは「……ああ、なるほど」と納得したように籠に戻すと、その緋色の視線で流れるようにこちらの全身をなぞった。

「……湯浴みしてきたのか？」

えっ、聞く!? 団長、それ聞くの!? 見れば分かるでしょ!?

「あ……ええと、すみません。それで……遅くなっちゃいました」「いや、いい、……いいんだ。ただ……」

じいっと見つめ合って、何か言いたげにして困った顔を隠さなかった彼に、首を傾げる。

そしてその表情に、どんどん得体のしれない焦りが募ってきた。

……ん？

「え、ええと……?」

目を丸くしてお互い見つめ合いながら、沈黙。

……あ……、あれ？　なんだか……とんでもない勘違いを、私はしているのでは？

という、なんともいえない不安がよぎる。勘だ。

「……あー……まあ、そう、だな。東の国では、据え膳食わぬは、とも言うと……以前、聞いた」

「……え？」

ええと、それってつまり……？

まばたきを何度もしながら、頭が真っ白になる。

「あ……え、も、もしかして……、そういうつもりじゃ、なかったですか!？」

顔が真っ赤になっている自覚がある。すごく恥ずかしい！

「ごっ……ごめんなさい！　どうしよ、やだ……!」
やる気満々で準備してきちゃった！

馬鹿みたいだ、とんだ勘違いしちゃった……！

「いやいや！ ……ああ、それは、……その、最終的には、そう出来ればよいな、とは……正直微かに期待してはいたが、さっきの今で、きみにその決断を迫るのはあまりに酷かと……思っていた」

「……え……」

……賤民として扱われてからは、ずっとなかった。

そんなふうには尊厳を守られたり、こちらの気持ちを優先されたのは、いつぶりだろう。

「……まず、なにより……触れられるかを試す前に、……その手を、……俺の手で、あたためたいと。……ただそれだけだった」

——ああ、どうしよう。

言葉にならなかった。

いまこの瞬間に、彼が前世の最推しであるだとか、ここがどんな世界であるのかだとか、勘違いをして恥ずかしかっただとか、そんなことがすべて抜けていった。

……この世界ではそんなふうに……、親以外でこれほどまでに純粋な思いやりを、他者から受けたことがない。

「そ……、そんな優しさを……、誰かにいただいたのは、初めてです」そんなこと、私が受け止めて、いいんだろうか。

堪えていたものが今度こそ溢れてしまつて、慌てて拭う。

「……ダリアから聞いた。きみは娼婦ではないんだろう？　言葉が足らず、すまなかつた。こんな短い時間で覚悟をさせて……」

そう言われてすぐ、目の前が暗くなる。

まるで、とても大きくて上質な外套にくるまれたような、全身にそんな感覚がした。

温かくて、力強くて、優しい。

ラグナスはその胸に私を包みこんで、大きな体で、ぎゅうつと抱きしめてくる。

その時に、やっと私はこの世界に受け入れてもらえた、と噛み締めることができた。

彼のことをまだ何も知らない。だけど、何もかもを知っている。

——私は、この人に触れるために、生まれてきたのかもしれない。ひどく落ち着いた心で、そう思った。



「……実は……生まれてからずっと、俺は両親以外の人間に長時間、触れたことがない」

とりあえず背中を押される形で促され、部屋の真ん中にあるベッドに、二人で腰掛けた。

「……私もです。父にしか触れたことがありません。父も、私にしか触れませんでした」

右隣に座ったラグナスは、穏やかな表情をしている。

指先で私の髪を掬うと、そっと背中に流した。どきどきする。

彼の視線はこちらに向いているけれど、見つめ合うのは緊張してしまふ。

それなので、私の視線は彼の膝あたりに置いてしまっていた。

鎧を纏っていない彼の普段着は、黒地に赤のポイントがところどころについている。

「……セオ、……あたためても、いいか？」

互いの間に、彼の左手が向けられる。

声なく頷き、彼の手の上に自分の両手を乗せる。「熱ければ言ってくれ」と小さく頷いた彼は、それに右手を被せて、慎重に包み込んだ。

「……はー……、あったか……」。

氷が溶けるようだった。

触れたところだけ、まるで湯船に浸けたようにあたたかい。

「……あ……」

「……ああ……」

互いに、純粹に声が漏れる。

「……ふだん、『冷たい！』って引っ込められるのが常なので、なんだか……」

「……ああ、俺も、『熱い』と……。熱したフライパンにでもなった気分になるんだ、いつも」

楽しそうに、リラックスした口調でそう言って笑った彼に、思わず笑顔を返す。

「ふふ……、フライパンって……」

口角を上げたまま、彼は視線を手元に移した。

「……それにしても痛々しいな」

あかぎれに触らないように、上辺の空気を撫でた彼の親指の動きは、触れられていないのに思いやりを感じた。

「撫でてやりたいが、これではいけないな。……あ。少し、いいか？」

そう言って、彼は重なりあった手に、上辺を撫でていた右手をかざして、しずかに目を閉じた。

手の周りがエメラルドグリーンに光って、ぽうっと温かさが巡る。それからゆっくりと、痛みが消えていった。

「……わっ……！ え!? 治った！」

炎を纏いし孤高の騎士団長は、私にだけ触れられる

「騎士が最初に覚える、治癒魔法だ。完治させることはできないが……ほんの少しの間なら、楽になると思う」
「す、すごいです！　ありがとうございます」

「これで、遠慮なく力が込められる」

ぎゅうつとほんの少し力を込めた、あたたかい手が包み込む。

……あ……、あったかい……！

芯から溶かされていく。

「……はあ。持って歩きたい」

握りあった手を見つめたまま、大真面目な顔でそう言った彼に、心が綻ぶ。

笑って頷いた。

「……ええと……、ラグナス様は……」

続きを促すように眉を上げ、ほんのり首を傾げた仕草すら絵になる。

「この熱って、手のひらだけに集中してる感じ……ですか？」
彼は「ああ、いや」と相槌を打つと、自身の体を見回した。

「全体的に熱はある、……と思う」

吸い寄せられるかのように、重なっていた手を彼の袖口の方へ滑らせて、指を差し込んだ。

「ん？」

「あ、冷まそうと思って……」

言った後に、けっこう大胆なことをしているな、と気がつく。

「わ、あ……！ 急にすみません！」

急に恥ずかしくなり引っ込めようとして、「いや」と止められる。

「いい。そのまま……続けていい」

そう言われ、引っ込めるきつかけを失った。

黙って小さく頷いて、そのまま指先を押し進める。

シャツの内側は、確かに熱のこもりを感じた。

するり、するりと手が届く範囲で摩るように触れる。

シャツの袖がこちらの手の動きに合わせて蠢いて、ぽこつと盛りあがった。

彼が何かに耐えるような顔をする。

「……あ……、くすぐったいですか？」

彼は小さく首を振った。蠢く腕を、見つめたまま。

「……触れられるというのは、……すごいな」

ほんのり熱っぽく懇願するように、「続けてくれ」と言われる。そのあまりの妖艶さに、ごくりと息を呑んだ。

「……ずるいと思わないか？ この心地よさを、俺たち以外の人間は、生まれながらに享受しているんだぞ？」

彼の知らない表情に、目を奪われる。

「……たしかに、ずるいですね」

頷き、曖昧に微笑む。

それから視線が向けられていることに気がついた。

彼は、こちらの目を覗き込むと、しずかに私の口元に視線を落とす。

ほどよい緊張感と、いまこの時を共有している高揚感。

それが同時に押し寄せた。

「……きみは？ 冷たいのは手だけか？」

視線は、そこにとどまったままだ。

「あ……私も、全身冷えてます。常に」

彼の腕が動く。するん、と袖の中を這っていたこちらの手がすり抜けた。

そのまま、私の喉をなぞった彼の指先が耳の後ろにたどり着き、頬を包む。

ゆっくりと……その親指が、下唇を弾いた。

「……ああ。手ほどではないが、冷えている……な」

緋色の瞳の奥が、慎重に私の目を左右交互にとらえている。

今が心地いい。壊したくないほどに完璧……なのに。
互いの呼吸が揃った。

——あ。

私たちは同時に、自然とキスをしていた。

柔らかくてあたたかで、しっとりした唇の感触が心地いい。

——……ああ、よかった。

彼は冷たくて飛び上がったしらない。私も、熱で怯えたりし
ない。
すごくちよいどいい。

あたたかくて大きな腕が、首の後ろにまわった。

きゅっと引き寄せられて、体が密着する。

一瞬唇が離れ、微かに目が合い、もう一度触れた。

「……んんっ……！」

触れる時間は短い。ちゅ……と音を立てては、わずかに離れて顔を
覗き込まれる。

視線は優しさの中に、浮かされたような熱も混じり合っていた。

「……熱く、……ないか？」

頷き、「……ラグナス様……は……？」と切れ切れに尋ねる。

「……俺も、大丈夫だ。……もう少し、深く……触れても？」

言いながら、彼はわずかに口を開きつつ寄せた。

頷く瞬間と触れる瞬間が重なって、はむっ……と唇を挟まれる。

「んん……っ、……ん、ふ……う……♡」

喰まれるたびに唇から、びりびりと微弱な痺れがこめかみに伝い、頭の奥でじわじわと溶ける。

唇に触れているだけなのに、うそみたいに気持ちいい。

ラグナスが「……は……あっ、……」と荒く息を吐いた。

あー……団長、その声、ヤバイ……。

低くて……鼓膜、溶けちゃう……。

急くように彼の舌先が齒列を撫で、促されるままそれを受け入れた。

そうすると、彼の舌の動きは途端に大胆なものに変わる。

柔らかくてぬるっとした熱い舌にからめ取られ、飲み下せない唾液がくちゅつと音を立てた。

彼の両手が、頬と耳を包み込む。

——えっ、あ……音が……、直接……！

ちゅく……、ちゅつ……、ちゅくちゅく……♡くちゅつ……♡

脳内に直に響く水音のいやらしさに、お腹の奥が熟れるように疼く。

彼の舌遣いは、受け止めながら可愛がられるような、思いやりのあるものだった。

ふう、と鼻で息をいなししているその表情は、あきらかに暴発を抑えているような激情が窺える。

きつと、私をできるだけ怖がらせないようにしたいんだろう。
ああ、やっぱりこの人、本当に優しいんだ……。

前世の記憶が混濁して、懐かしいような、新しいような。

ごちゃついた気持ちすら心地いい。

興奮の中にいるのに、なんだかホッとする。

キスだけでこんななっちゃったら、私、この先、保つのか

な……？

頭の中でそんな自分への疑いを持ちながらも、できるだけ真摯に応えた。

経験豊富そうな勇ましい風格と美しい顔立ちなのに、初めてのキスに夢中になってるのが少しあどけなくて、堪らない。

繰り返し返される甘くてとろけてしまいそうなキスに、何度も頭の奥が痺れた。

はしたない声も漏れ、思わず膝を擦り合わせたところでやっと、唇が離れる。

「……ん、はあっ……、はあっ……」

息を整えるうちに、彼は肩口に顎を乗せ、興奮をいなすように「……ふう……」と熱い息を長く吐いた。耳にかかるそれに、ぞくぞく……っと身震いする。

「ん……いい、匂いがするな……」

「……え……?」

なんのことを言っているのか、わからなかった。

ラグナスは耳の後ろに鼻先をつけて、まるで犬みたいに髪の付け根をかき分けるように擦り付ける。

すう……、と息を吸う音も。

だ、団長、嗅いでる!? 何を……!?

「……なぜ……こんなにいい香りなんだ? はあ……」

「あ…………えっと…………、湯浴みをしたばかり、だから…………だと思いま
す…………」

「…………いや、それだけじゃない。きみ自体の香りも混じり合っ
た、…………もつとこう…………」

彼は頭だけを動かして、甘えるように首元に顔を埋める。

「…………舐めてみたくなる、香りだ」

それだけ囁いた彼は、耳の後ろでぬろ…………と水っぽい音を立てて、
舌を這わせた。

背中になわっていない方の手が、ふわりと乳房を包み込んで、何度
も優しく撫で上げる。

触って欲しいと主張するように、痛くなるほどに乳首が硬くなって
いくのを感じた。

「…………あ…………、こんなに、柔らかいんだな」

「…………ひあ、♡ うう、…………！」

胸の刺激と、耳輪を舌先で舐められる感覚が重ねられ、ぞくぞくぞく……っ♡ と全身が粟立った。

ぴちゃっ……♡ くちゃ、ぴちよっ……♡ 耳を口の中に含まれて、その舌は耳の中へと入ってくる。

ぬめりのある水を潰した音が直に響き、何度もビクビク……ッ♡ と震えた。

ぞわぞわ鳥肌を立てて、力が抜けて、くたりとベッドに倒れ込む。追いかけるように覆い被さられ、衣服の上から親指ですりすり……♡ と突起した乳首を確かめるように擦られた。

「あ……♡」

「……ここ、好きなのか？」

人差し指と中指に変えて、指先でそうっと交互に弄ばれる。

「あ……っ♡ っや、あ……!」

「これが好きか？ ……ほら、俺を見るんだ」

顎を掴まれる。「やっと……、目が合ったな」と、ほとんど強制的に視線がぶつかった後、彼が微笑んだ。

「教えてくれ、どちらがいい？ この……引つ搔くのがいいのか、それとも……」

また指は親指に戻り、すりすり……♡ ともどかしく撫でてくる。

「こうしてそつと……撫でられるのでは、どちらが好きだ？」

「ああっ……♡ んっ、あ……♡」

「ん……、大事なことだろう？ ちゃんと……教えてくれ」

すりすり……♡ かりかり……♡ 交互に、意地悪に、服越しに弾かれるのがたまらなく恥ずかしい。

やだ、カリカリやだ、どっちも……、気持ちよくて、あ、……だめ、だめ……！

「はあっ……♡ やっ……だあ……！ あ、やめ……♡」

「ああ、そうか。どちらも好きなのか。じゃあ……、これ……は？」

ぐりっぐりっ♡ と乳首を摘まれ、服越しにきゅっとねじ上げられる。

「ひいっ……ああッ♡」

ふわっ……と意識が一瞬、遠のいた。

え、……なに……!? なんか、変……。

「あ……、これも好きか。好きなんだな……？」

じんわりと溶けたようにふっ、と微笑んだ彼の顔を、息を切らせて見つめる。

ああ……、なんだろ、すごく愉しそう、団長……。

ぼんやりとしながら見つめ合っていると、「……顔が蕩けてる」と溶けるような顔をして言われた。

「……ラグナス様も……」

起き上がり正面に座って、頬を撫でてみる。

熱が少しこもっていて、触っているとどんどんそれが伝わってきて、あたたかい。

「……ああ。触れているだけで気持ちがいい……。触れて、触れられるというのは、こんなに幸せなことなんだな」

きゅ、と抱きしめられる。

触れていると、熱い胸から鼓動が伝わってきた。

今世で初めて深く触れ、ひとつひとつの愛撫が優しく、全部が性感帯になったみたい体に体が疼く。

まだ、唇と、耳と、胸だけなのに。

「ああ、よかった。少し、……熱が移ったか」

どこか満足げに頭を撫でてくれる手が大きくて、伝わる熱が心地いい。

体の間、足の付け根で、もぞりと熱く硬い感触が駆け抜け、一気にそこに神経が集中した。

「……あ……」

「……はあ……、すまない。抑えが……あまり、効かず……」

「い、いいえ……！ 大丈夫です……」

擦り付けられるのがむしろ熱くて、気持ちいいくらいだ。

服の上からでもその熱さが伝わる。……それに、何より……。

……待つて……。めっちゃめっちゃ大きく……ない？

身長や体格で、薄々勘づいてはいた。

けれど、一抹の不安がよぎるほどには、彼のそれは感覚だけで長くて太いということが伝わってきた。

思わずそうっと、密着した体をほんの少し浮かせ、スラックスを寛げさせる。手を入れて、ほかほかとしたそこに指を這わせてみる。

体が離れているわけではないから、見ることはできない。

それでも、硬くしなった熱棒の感触はわかる。

しっとりとしていて、時々ぽこぽこつと血管の浮きを感じた。

裏筋がほんのり波打っていていやらしくて、息を呑む。

「……んっ……、ん!？」

驚いた、といわんばかりのその表情と、ばちっ、と目が合った。

「ごめんなさい……！　　っ、冷たいですか……？」

恐々と尋ね、思わず手を引っ込めようとして、素早く掴まれる。

「いや、……うう……、ひんやり……しッ……でいて、……最高

だ……」

彼は必死に首を横に振った。

じわっと汗ばんだ額が、薄暗いランタンのオレンジにぼんやりと反射している。

「セオ、……きみ、大胆だな」

余裕のない顔がいとおしくなり、ほんの少しおどけて首を傾げてみせた。彼も穏やかに笑った。

もう片方の手もそつと突っ込んで、両手を使ってまんべんなく包み込む。

「あ……すつごくあったかいです、ラグナス様の、ここ……」
ゆっくりと上下に扱くと、「くっ……あ、待っ……！」と苦悶の声
が上がる。

……あ……、気持ちいいのかな。

ごくりと喉仏が上下し、頬に傷の残る美貌を歪め、上擦った声を出す彼に見惚れる。

ああ、だめだ。

感じてる団長、あまりにもセクシー……！

素敵すぎる。ガッチガチに硬くて、ああ、これ……入ったら、すご
そう……。

思わず、はあ、はあと息が荒れる。

変態だ、私……。

「んんっ……、くっ……！ あ、セオ、待っ……、待て、これでは俺が……先に、……！」

手のひらがペニスを滑る、しゅっ……♡ という音が続く。

慈しみを込めるこの行為は、今までの記憶の中では、一番愛おいしいものに思える。不思議だ。

前世でも手コキとか……求められないとしなかったなあ……。

「……大丈夫。ラグナス様、イキたいときに、……」

「いや、だめだ、……あああっ、くっ、あっ、まで、うあ……！」

……あ、汚れちゃうかも。

ただ、そう思ったただけだった。

扱う手を止めて、スラックスに手をかける。

「あ……、あ……？ なぜ……」

なぜやめたんだ、と言わんばかりの、残念そうなほんのり潤んだ瞳。

上氣した彼の顔に、胸を撃ち抜かれそうになる。

「あ、ええとほら……、汚れちゃうと、だめでしょう？」

「……は、……あ、……そう、そうか。……ん……」

彼はこくん、と溜まった息を嚙下させ、息を切らせている。

こんな場面でほんの少し弱気な彼の表情を、初めて知った。

——ああ、いい。たまらない。

「……ラグナス様、では……続けますね」

「えっ、……はっ、……んっ……！」

指を這わせ、乏しい知識を総動員させて、思いつく限りの動かし方を試す。

指先で鈴口をくるくる……♡　したり、両手で交互に指をバラつかせて扱いたり……。

彼が、今まで感じられなかった分まで気持ちよくなってくれたら、幸せだ。

——…触れられるって、幸せだ。

「あぁっ…、はぁ、セオ…、あぁ、いい…ッ…」

とぷとぷと溢れ続ける先走りを潤滑油の代わりにまぶして、しっかりと扱く。

ぬちぬち♡ と音を立てながら大切に擦り上げると、怒張はもっと大きく膨らんだ。

感じ入る彼の視線に溶けそうになりながら、絶頂が近いことを感じとる。

ベッドサイドに置いていた籠の中から、体を拭うために用意されたクロスを一枚、そっと抜き取った。

「…あ、あぁっ…、で、出るッ…！ はっ…、んっ…、く、…ッ——…!!」

びゅるっ、びゅるびゅる、びゅるるる——…♡

熱くて粘度の高い液体が、何度かに分けて彼の陰茎から勢いよく放射される。

……うわあ、すごい、量……。

「く、……ぐっ、……うっ……ふ。う、……！」

何度かに分けて吐精するたび、その快感に悶えて四肢を震わせる彼は、あまりにも美しかった。

実際に彼がいたら、どんな風に達するのか、ずっと見てみたかった。

歪めた美貌を隠さずに、解放されて朦朧とした吐息を漏らす。

びく……っと何度も小刻みに揺れる鍛え上げた身体も想像していたよりも綺麗で、見惚れてしまうほど色気があった。

受け止めるために被せたクロスが、みるみるうちに大量の熱い精液でじんわりと染みてくる。

四方に飛び散ってしまうのをすんで防げて、密かにほっとした。

「……はあっ……、はあっ……」

くたりと体をこちらに預けた彼は、肩で息をしながら、「なんなんだ、これは……。最高に気持ちよかった……。すまない、ありがとう……」と力無く囁いた。

微笑んで「……よかったです」と答えてから、手に僅かについてしまった彼の精液をぺろっと舐めてみた。

青臭い苦味が、微かに鼻をつく。

……やっぱり推しの精子だとしても、あんまりおいしくは、ないものなんだなあ……。

「……え、舐め……？ セオ……？」

気がついたら、真横で信じられないものを見るような目で、ラグナスがこちらを凝視している。ハッとした。

どうしよう。舐めるの……、引かれたかな？

「ご、ごめんなさ……」

しかし、ガバツと勢いよく抱きしめられた。

え、なに!?　なんで……

「……う、ぐ、ふ……?」

「……こういうこと、は……、一生望めないと、思ってたんだ」
きゅん、と胸が高鳴る。

高貴な香に混じった、あたたかくて野生的な匂い。

スパイシーにも感じるそれを吸い込みながら、彼の胸に顔を埋める。

なんだか、この匂い、お腹にじんじんくる……。

「……ありがとう、セオ……」

「いえ……。私こそ、同じことを思っていました。ありがとうございます
ます、こちらこそ……」

顎を掬い上げたラグナスが、慈しみを込めた瞳でこちらを見つめてくる。

たまらなくかつこよかった。

ちゃんと現実で血潮の流れる彼を目の当たりにして、そのときめきにいつまでたっても、心も体も慣れてくれない。

どきどきしていると、そつと親指で唇を弾かれる。

そのしぐさで、容赦無くぎゅうぎゅうに胸を締め付けられた。

同時に……私は、どうしようもないことに気がつき始めていた。

——だって……ここ、娼館だよ？　こんな、気持ち……。どうしようもない。

彼は今、疲れて熱った体を、お金を払って癒しにきている……。

そもそも彼の中でここを利用することは、頭になかったかもしれない。

けれど、ここはそういう場所で……。

そんなこと忘れてしまうくらい、夢中になっていた。

……本気で好きにならないように、しなくちゃ。

「……セオ？」

ぼんやりしてしまっていたらしい。ハツとして目を合わせると、彼は額を私のおでこにすり寄せた。

「……この時間、俺だけが得をする形になるのは、本意ではない……」

躊躇いつつ、低い声で彼はそう言った。

「え……あ、いえ、だって……」

そういうお店、ですよ？　と言おうとしたけれど、真摯で思いやりをふくんだ彼の眼差しに、なにも言えなくなる。

「……俺も、きみに直接触れてみたい。いい、だろうか……」

紅潮した目元が、その本音を隠す事なく訴えてくる。

買われている身だ。本来、それを恥ずかしいと拒否できる立場にいない。

「……ええ。もちろんです……」

この答えで、合っているだろうか。彼は安堵したようにまなじりを下げ、ちゅっ、と額に口付けてくる。

心がまた、きゅんと押し上げられた。

それから角度を変え、どちらともなく引き寄せられてキスをする。唾液の混ざり合う音が互いの間で鼓膜を揺らした。

開け広げられた窓から、風が吹き抜ける。

ほんの少し、それが涼しく感じた。

春の宵、遠く……ずっと遠くのほうで微かに音楽が聞こえる。日本の音楽とは違う、ケルトに近い。

バグパイプの明るいうねるような音。これがこの世界の祭囃子。花祭りが近いので演奏者が夜に練習しているのだろう。

窓の外には、やたらと近い星々が煌めいていた。

唇と舌をやわやわとくすぐるような刺激が、引いていた熱を呼び戻していく。

編み上げられた胸元のタイが、いつのまにかほどかれていることに気がついた。ドレスが肩から薄い下着も連れてすべり落ちる。

「あ……っ」

彼は、はあ……と熱い吐息を漏らすと、あらわになった乳房を両手で包み込んだ。

ふわふわと感触を確かめるように揉みしだかれる。

「やわらかいな……」

そう呟いたあと、何度も硬くしこった蕾をくにくに捏ねた。

「ん……ッ♡ う、あ、……んん……♡」

「……ここは……硬く、……勃ってる」

親指で潰すように押し込まれる。

「あっ……♡ あ♡ うう♡」

きゅつと縮んで尖った先っぱを、熱く濡れた舌でぱくりとやさしく包まれた。

とろとろとした感覚に溶けてしまいそうだ。
はち切れそうな刺激が、正気を奪っていく。

口の中で飴玉を舐めるみたいになつとりと転がされて、ちゅっ、と
吸い上げられた。左右交互に続くそれに、頭がどんどん痺れてくる。

「んう……ッ♡」

感じ入るうちに、手がお腹のほうへ降りていく。下穿きを通り抜けた指先が、そっと秘部をまさぐった。

くちゅ……♡ と体の真ん中で水音を立てられ、たまらず腰が跳ねる。

「は、あ……♡」

あ……やばい。こんな、恥ずかしい……。

「……とろとろ……してる……」

「あ……！」

熱い指が秘裂をぬる……っ♡ となぞった。

ぬるぬると滑り、こりつと指を跳ね返した小さな突起にビクンツ♡
と体が反応する。目が合った。

「……ん？　ここ……」

もう一度こりこり♡　と確かめるように、花芽の上で指が揺れた。
じんわりとした彼の指のあたたかさが気持ちよくて、余計に刺激を強くする。

「ひゃ……♡　あぁっ♡　あう……っ♡」

慌てて手で彼の肩を押し返そうとした。でも、力が入らない。案の
定びくともしなかった。

「っふ……♡　ああっ……!!」

ぴくん、ぴくんと打ちあげられた魚のように体が跳ねる。

「やつ、あ……、やめ、……やめて、あ♡　あ♡」

「……ここ……、気持ちいいのか？」

窺いをたてながらそうつと触れられているのに、刺激が強すぎてイヤイヤと首を振る。

さっきから何度も、意識が飛びそうになっていた。

「……ん、もう少し……触ろうな？」

耳のすぐそばで、低い声で優しく囁かれる。

下半身の刺激も手伝って、ぶわわっと何かがせり上がる。

ゾクゾク……♡と背筋を這い上がる快感は、この体で感じたことのない底知れぬ未知の感覚だ。

「あ……、あ、ラグ……さ、くる、こわ、い……、こわいです……」

思わず縋るように首を振りながら彼を見た。

どうなるか分からなくて、怖い。

遠い記憶で知っているような気がするはずなのに、この体ではまだ分かっていない。

彼は小さく頷くと、熱く溶けるような緋色の瞳で、息を荒く切らし、こちらを見つめている。

「ああ、……はあっ、大丈夫だ。ここにいるから、感じるままに、ほら……」

くるくると円を描くように捏ねられて、くちや♡ くちや……♡ と音を立てる。

「あ♡ きもち、い♡ あっ♡ ダメ、だめ……！」

もう……もう、あたま、真っ白に——……！

「う……、ああ……ああッ……♡」

びくびくと跳ねる体を、片手で頭をきゅっと厚い胸元に寄せられ、支えてくれる。

荒れた熱い彼の吐息が、頭を撫でた。

ふう、ふうと息を整える間、ただ朦朧と彼の胸に頭を預けて、もたれかかる。

分かった、この人……。丁寧なんだ。

だから……。あ……。こんな……。気持ちいいんだ……。

ぼんやりとしていると、そつと体を離して彼はこちらを覗き込む。

「……大丈夫か？ 横になるといい」

抱っこしたまま眠った赤ちゃんを降ろす時のように、彼は慎重に優しく、私の体をベッドに倒した。

額にキスをされると、特別扱いされている気になって胸が痛む。

「大丈夫……。です……。すみません……」

「なぜ謝るんだ？ 俺は、こんなにいい思いをさせてもらってる」

そう言つて微笑むと、やがて体ごと下にずれていき、強い力で足を開かされた。

「ん……。え……。？」

彼の視界に入ってしまった秘部はぐちゃぐちゃで、恥ずかしさがつのつた。

ぐいーっと広げながら、両膝の裏を軽々しく持ち上げて、私のそれを覗き込む。

顔を近づけられて、思わず手で覆い被せた。

「まって！」

「……達したら、こうなるのか」

れろっ……と指ごと舐め上げられる。

「ひっ……、あ、あうっ♡」

顔を埋めて、「隠しても……溢れてくるぞ、手を離せ」と言いながらぴちゃぴちゃと指の間から舌先が入り込む。

手もぺろぺろと舐められて、どうしたらいいのか分からないほどに感じた。

「ああ……、んうっ……♡ あ♡ あ……！」

「他のところより……、少しだけ温度があるな。はーあ……む……♡」

まるで子猫がミルクを舐めるみたいに、丁寧に舌を這わされる。体の内側から、とろとろと蜜が滴るのを感じた。

「……んむ、良さそう……だな……」

「は、あ……、やんツ……♡ また、……！」

手を跳ね除けられて、舌を平べったくして、べろーつと刮げる。愛液が全部なくなってしまうんじゃないかと思うくらいに強く舐られて、また頭が真っ白になった。